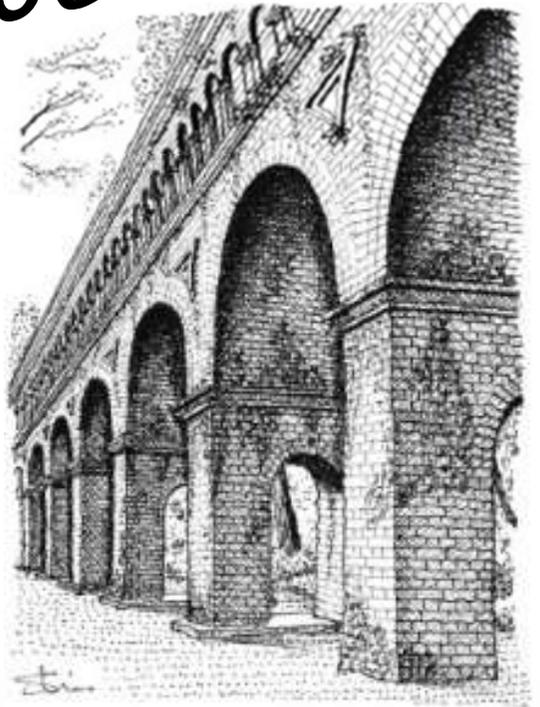


見
本

沢田 伸 ヘリテージスケッチ (仮)

時代を超える文化としての建築と風景



ヘリテージマネージャー制度創設から現在まで、
そして、3000枚のスケッチへの足取り！

はじめに

「建築を文化に」

そんな思いが芽生えてきたのは、建築を学び始め、仲間と一緒に建築を見て回る日々が続いた学生時代だった。

時代は高度成長期末期、スクラップアンドビルドが繰り返され、町は洗練されたデザインの建物が林立し始め、建築雑誌をにぎわしていた。コルビュジェや丹下健三に惹かれた。自分も「建築家」になって、歴史に残る建築を設計してみたいと思ひ、建築雑誌をむさぼるように読み、仲間との議論に明け暮れる日々を送っていた。

ところが、何の前触れもなく、好きはずの建築が、自分から縁遠い存在であるとの思いに襲われた。身近にあつてほしいと思うものが、すごく遠くにいつてしまったような気がした。

「この白々しさは、一体どこから来るのだろうか？」

新しく誕生した建物がなぜか白々しく感じられた。この白々しさを克服しない限り、自分が設計した建築もまた白々しく縁遠いものとなってしまう。建築は単なる装置として機能しその役割を終えれば姿を消していくだけの消耗品なのか。目を引く建築もまたファッションとして消費されていくだけのものなのだろうか。そのことが気になり、仲間たちと議論したが、話はすれ違い、答えを見出すことはできなかった。

ただ、建築は身近なものであつてほしいと思つた。

一九七〇年、大阪万国博覧会が開催された。私は、一人の建築学生として万博を冷ややかに眺めていた。趣向を凝らした多彩のパビリオン群も「月の石」にも心躍ることはなかった。しかしそんな中で「太陽の塔」だけが気になつていった。

岡本太郎という強烈な個性の放つ輝きに目を奪われた。そこには白々しさはまったくなく、

揺さぶるような波動があった。作者がどうしても伝えたい「思い」が伝わってくる。モノはこういった「思い」の奔流が背景にあつてこそ、自他の垣根を超えるのだと感じた。ここに「白々しさ」はなかった。

「建築を文化に」

建築が、ファッションや消耗品ではなく、「文化」になる。作り手の熱い思いが建築を文化にする必要条件なのだ、と自分なりに結論付けた。

しかし、岡本太郎ほどの強烈な個性に期待していたのでは、文化としての建築はすごく限られたものとなってしまふ。作り手側の思いだけではなく、受け手側の感受性にも期待しなければならぬが、これまで、双方が近づく努力がどれほどなされてきただろうか。

建築の学問世界やジャーナリズムは、仲間内にしか理解できない言葉で議論し合い、建物の表層的なビジュアルだけを提供してきたのではなかったか。

そんな時代に変化が見え始めたのは、藤森照信氏の登場だった。彼は、専門家でない一般人にも理解できる言葉で建築を語り、見慣れていて誰も振り向かなかった建物にも光を当て、新たな発見をもたらしてきた。ここによく、作り手と受け手の間に橋が架けられたと思つた。

さらに、建物や風景に対する思いを共有する出来事があつた。阪神淡路大震災をはじめとする大規模災害である。これまで見慣れてきた建物や風景が一瞬にしてなくなつてしまった時、だれもが喪失感を味わつた。なくなつてしまったモノは、自分とは無縁のものではなく、実は共に生きてきた「記憶」であり「証し」であり「文化」であつたのだ。建物や風景は、かけがえのないものとして私たちとともにあつたのだ。

阪神淡路大震災を経験した兵庫が、その教訓を生かしてヘリテージマネージャー制度を発足させた。「文化」としての建築や風景を次世代に伝えていく役割を担う人材群の育成である。

その後、ヘリテージマネージャー制度は全国に広がり、歴史文化遺産をまちづくりを生かす活動が各地で展開されるようになってきた。時代は確実に変わりつつある。毎年のように開催される各地の「建築祭」に多くの人が参加するのは、建築や風景を身近な文化としてとらえ始めている証左であると信じたい。

四〇歳から描き始めたスケッチが一〇〇〇枚を達成した六〇歳の時、『兵庫ふるさとスケッチ』を出版することができた。その後、二〇〇〇枚を達成したら第二弾を、と思っていたが、なかなかどのような切り口でまとめるか。考えがまとまらないでいた。『兵庫ふるさとスケッチ』の在庫も底を尽き、再販を望む声もあつたが実現できずにいた。

二〇二五年六月、ヘリテージマネージャー養成講習会の受講生有志が、私のスケッチ本出版のプロジェクトを立ち上げてくれたことを知る。嬉しくてたまらなかった。

このとき、本のテーマが一気に固まっていた。普遍的で資料性のあるものにこだわるのをやめ、志を同じくする人たちや興味のある人たちを対象にしたものにしよう。講習会終了後の懇親会での雑談のようなものもいいかもしれない。講義では話せなかったこと、どうでもよい個人的なことも書いてみよう。

思えば、スケッチを通して、私は愛する建築や風景との対話を楽しんできたようである。モノは語っている。その声を聴く耳さえあれば、世界は彩り豊かなものになってゆく。ヘリテージの活動はスケッチ作品の幅を広げてくれたし、文化の裾野の広さを感じさせてくれた。

ヘリテージとスケッチ：・いずれも、ある一言がきっかけとなって始まった。

「手を動かし続けることだ」

「ヘリテージマネージャーをつくりたいんやけど」

この二つの一言が、私の後半生を迷いのない心躍るものとしてくれた。

喜寿を迎えた日、描き続けてきたスケッチは三〇〇〇枚を数えるに至った。



三〇〇〇枚目に選んだ題材は、茨城県古河市にある「野木のホフマン窯」である。ホフマン窯は、レンガを大量生産するためにつくられた近代化遺産である。

目次

第一章 スケッチを始める

- 兵庫県営繕課
- 出先機関への異動
- 三田建築探検隊
- 千枚のスケッチ
- 白髪の画伯との出会い
- 営繕復帰
- 神戸高校校舎建替え

第二章 ヘリテージマネージャー

- 阪神淡路大震災
- 復旧から復興へ
- 兵庫県建築士会会報『つどい』
- そもそもの発端「つくりたいんやけど」
- 兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会
- 広告塔としてのスケッチ連載
- 係長昇格 芸術文化センター整備室
- 芸術文化センターの工事現場にて

第三章 アメーバー型ネットワーク

- 受講生の思いを形に
- 得体のしれない組織
- 二重のネットワーク構築へ
- 地区世話人と地区懇談会
- ひょうごヘリテージ機構H₂O
- この指とまれ方式

アメリカ型ネットワークを実現するために
『兵庫ふるさとスケッチ』出版と個展開催

第四章 時代の変化への対応

一〇年責任論

自由と責任

各地区にNPO法人が誕生

ヘリテージマネージャーの一般への浸透

旧グッゲンハイム邸

時代の変化「地方消滅」

地域の共有財産に・・・建築祭

元廃墟マニア

ヘリテージコーディネーター

アメリカ型ネットワークの新展開

兵庫県立博物館

第五章 ヘリテージ 兵庫から全国へ

全国に先駆けて

全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会

協議会運営副委員長

全国の動向とスケッチ取材

北海道／東北／関東・甲信越／東京／東海・北陸／近畿／

中国・四国／九州

第六章 海外旅行とスケッチ

最初の海外旅行 一九九〇

イタリヤ	結婚二〇周年	一九九六
上海・蘇州	職場旅行	二〇〇三
韓国	勤続三〇年	二〇〇五
トルコ	退職記念	二〇一〇
中国・青島		二〇一〇
中欧五か国		二〇一八

付録 私の描画作法